



う え としかつ  
宇江 敏勝 氏

生年月日 昭和 12 年 8 月 28 日生

住 所 田辺市中辺路町野中

昭和 12 年 (1937 年) 8 月 28 日、三重県尾鷲市に生まれる。

幼少のころ西牟婁郡近野村 (現田辺市中辺路町野中) に住まいを移し、熊野の樹林で製炭業 (炭焼き) を生業とする両親のもとで育つ。昭和 32 年 (1957 年) に熊野高等学校を卒業し、家業の製炭業に従事、やがて植林や伐採などの山林労務に従事するようになる。炭焼きと山小屋での生活、植林作業など、厳しい杣 (そま) 作業の傍ら執筆活動に励み、詩と小説の同人誌「VIKING」や「文学界」に参加、小説「牧歌は途絶えた」を発表する。

当初、創作文学への道を志すが、やがて非常に特異な世界に居る自分に気付き、山の生活を内側からありのままに描写する手法へその執筆の姿勢を変え、昭和 55 年 (1980 年)、自身の生い立ちやその生活を克明に綴った『山びとの記』 (中央公論社) を上梓、簡潔な文体と実際の体験に裏打ちされた作品のリアリティーが注目を集めることとなる。

氏の執筆の多くは、これまであまり紹介されなかった山びとの暮らしを、昭和 30 年代からの時代の移り変わりの中で、自身の生活体験を下敷に自らの目で確かめて記録し、広く世に紹介するものであるが、それは山仕事の内容や具体的な方法から、産業としての「林業」と対峙して客観的に考察を加え、問題提起し、さらには失われつつある日本人の情操にも踏み込んだ内容に至るまで、平易な表現で語りかけるものである。

今なお熊野の里に居を構える氏は、この間、平成 14 年 (2002 年) に 7 年の歳月をかけた選集『宇江敏勝の本』第 1 期全 6 巻を完結させ、紀伊半島だけでなく日本各地の森に山びとを訪ね、紀行やエッセー、聞き書きなど、さまざまなスタイルを駆使して綴られた記録文学を集成。こうして氏の著作は昭和 55 年 (1980 年) の『山びとの記』の出版以降、この選集を含めて、増補、改定、再販等を合わせると 26 冊を数え、現在も活躍中の「山の作家」である。

また、著述業や山林業の傍ら、これまでの豊富な知識と経験を生かして「熊野古道」や「熊野奥駈道」の語り部としても活躍するとともに、講演活動など、さまざまな機会を通して熊野の魅力と自然のすばらしさを広く紹介している。

## 第 36 回 (平成 17 年)

### (略 歴)

昭和 32 年 (1957 年) 3 月	和歌山県立熊野高等学校卒業
昭和 32 年 (1957 年) 5 月	家業の製炭業に従事
昭和 33 年 (1958 年) 10 月	近野森林組合青年作業班に在籍、林業労務に従事
昭和 48 年 (1973 年) 9 月	切口造林 (奈良県野迫川村) の現場責任者として、山小屋に居住
昭和 55 年 (1980 年) 6 月	『山びとの記』(中央公論社) を出版、執筆生活に入る
平成 4 年 (1992 年)	語り部として熊野古道の案内や講師を務める
平成 14 年 (2002 年) 10 月	選集『宇江敏勝の本』第 1 期全 6 巻 (新宿書房) を完結、引き続き第 2 期全 6 巻を刊行中

### (主な著書)

『山びとの記』(中央公論社)  
『山に棲むなり』(新宿書房)  
『焼日記』(新宿書房)  
『昭和林業私史』(農山漁村文化協会)  
『熊野草紙』(草思社)  
『木の国紀聞』(新宿書房)  
『青春を川に浮かべて』(福音館書店)  
『森のめぐみ』(岩波書店)  
『樹木と生きる』(新宿書房)  
『森を行く旅』(新宿書房)  
『山びとの動物誌』(新宿書房)  
『熊野修験の森』(岩波書店)  
『森の語り部』(新宿書房)  
『若葉は萌えて』(新宿書房)  
『世界遺産熊野古道』(新宿書房)

### (受賞歴)

昭和 58 年 (1983 年)	和歌山県文化奨励賞
平成 3 年 (1991 年)	第 15 回井植文化賞
平成 10 年 (1998 年)	地域文化功労者文部大臣表彰
平成 17 年 (2005 年)	和歌山県文化功労賞